

『インドへの道』再訪
— R. P. ジャブヴァーラ作
『暑さと埃』(1975) —

榎本眞理子

1. 『インドへの道』と『暑さと埃』

『暑さと埃』は様々な点でE. M.フォースターの『インドへの道』とかかわりの深い作品である(Crane 80-84)。この二つの作品には、登場人物、時代背景など様々な共通点がある。わけても我々読者の目を引くのは、イギリス人とインド人との心の通いあいというテーマが『暑さと埃』でも取り扱われていることである。この小説には二人の主人公がいる。一人はオリヴィア・リヴァーズ、もう一人は無名の語り手(以下「私」と略記)である。ダグラス・リヴァーズの後妻の孫娘にあたる「私」が、インド人のナワブ(太守)と駆け落ちしてしまったオリヴィアの話、彼女の手紙をもとに物語っている。また「私」自身も様々なインド体験をする。

タイトルは酷暑が九カ月も続き、慣れない人は気が狂いそうになるという、インドの夏の暑さと、いくら扉を閉ざしておいてもどこからともなく入り込んでくる埃のことであり、またイギリス人を狂わせるインドの文化や現実のことである。またheatは情熱(オリヴィアとナワブの恋)、dustは塵から生まれ、塵に還る人間のこと(「私」が見聞きする女乞食の生と死)でもあろう。

イギリス人とインド人との心の通い合いは、1923年の話では主にオリヴィアとナワブの恋を通して描き出されている。オリヴィアはインド人であるナワブを対等な存在と見ている。それで恋愛が成り立つのである。この点で『暑さ

と埃』は『インドへの道』とは対照的である。『インドへの道』ではインドに好意的だった二人の女性でさえも、否定的なインド体験をしているのである。

インド人医師アズイズと心の通い合う時を持つムア夫人は、マラバー洞窟の真暗闇の中ですべての音を「ボーン」という意味のない響きに還元してしまう残響効果に圧倒される。そして洞窟の中で一行の中に「悪者」がいるはずだ、という妄想を抱く。疲労こんぱいしたムア夫人を絶望が襲い、夫人はアズイズへの暖かい気持ちも含め、人生に対するあらゆる興味をなくしてしまうのである。またアデラ・クウエステッドは洞窟でアズイズに襲われたという妄想を抱く。二人は共にインド人への好意を持ちながら、強烈なインド体験に耐えられず、精神のバランスを失ってしまったのである。マラバー洞窟は二人の心の奥底を鮮やかに映し出す特殊な鏡の役を果たしている。西洋文明の支えを失ってムア夫人は己の生の空しさに直面し、悪の存在を洞窟の中の人々に投影する。またロニーと結婚すべきか悩むアデラは性的な妄想を抱く。若い女性のアデラが、性的な欲望を異国人の上に投影するのは大いにありうることである。女とインド人がどちらもイギリス人の男より劣ったものにとらえられているところは『インドへの道』と『暑さと埃』のオリヴィアの物語の両者に共通である。

『インドへの道』の最後で「まだ無理」と否定されている、インド人とイギリス人との心の通い合いが『暑さと埃』では実現されている。1923年の話の中のオリヴィアとナワブはそれに限りなく近づき、そして最後に「現代」（1970年代）の話の方で、オリヴィアの精神的娘に当たる「私」がインド人ラルとの間の子を生む決心をするという形でそれを実現している。アデラには出来ず、オリヴィアにも完全には成し遂げられなかったこと、つまりインド人を対等な存在として受け入れることが、「私」に至ってようやくできるようになったのである。

明らかに『インドへの道』におけるよりも深い、イギリス人とインド人との交流が、『暑さと埃』には描かれている。前者ではフィールディングが一貫してアズイズ始めインド人たちのよき理解者ではある。しかし彼はあくまでも優越者の立場を崩さない。これに比して『暑さと埃』のイギリス人ハリーはナワブを心から愛し、尊敬している。またアデラにとってインド人とのかわりかはレイプの妄想という不毛なものに過ぎなかったが、オリヴィアとナワブは互い

に惹かれ合い、愛し合う。ナワブの人物像もアズイズとは違い、複雑であり、また強い存在感がある。しかしオリヴィアは混乱のあげく子供（ダグラスのかナワブのか分からない）を、ナワブの母の助けを借りて墮ろしてしまう。そして「私」はインディア・ラルとの子を産む決心をするのである。ナワブは、インド人を夫とし、インドに25年にわたって暮らしたジャブヴァーラにして初めて描ける人物像であろう。そしてジャブヴァーラ後の作品、『三つの大陸』のクリシーのような、神秘的なまでの人物像の先駆ともなっている。『暑さと埃』の中でもオリヴィアと同世代の人々は彼女の話をつぶして語りたがらない。しかし第二世代（「私」の親たち）になると聞きたがり、そして第三世代の「私」はオリヴィアの話に大いに心惹かれ、実際にインドにまでやってくる。「インドの魅力が分かる」とは言ってもミニズ大佐などはあくまでも「距離を保っていないとこちらがめっちゃめっちゃになってしまう」と言う。オリヴィアでさえ最後の最後まで部屋をイギリス風に美しく飾り、ピアノを弾き続けた。そして50年後の語り手の周りにも、インドの強烈な現実との接触に耐え切れず、精神が崩壊してしまった若者、逃げ出して行く者、また救済者コンプレックスにとりつかれていてインドの生の現実を軽蔑して避け続ける者など、様々である。これらに比して語り手の態度は最初から柔軟であり、彼女がインド人とのコミュニケーションにも成功するであろうことを読者に最初から予想させる。また精神の高みへと向かう最後の動きも小説全体の自然な帰結として説得力のあるものとなっている。

疲れきって帰宅したダグラスは暑さと埃をしめだし、仕事を忘れてオリヴィアと家庭で憩う。一方オリヴィアは次第に暑さと埃を含むインドの風景を楽しむことを学んで行くのである。風景を楽しむとはインドを受け入れることであり、ナワブを愛するとはインドを、対等な存在として認めることである。そしてナワブを愛することは単にインドを愛するという事に止まらない。「インド人は子供でイギリスという後見人を必要とする」という思想を根底から覆すことであり、さらにはそれを支える家父長制を否定することにもつながる。前にも述べたように、オリヴィアの義理の孫娘にあたる「私」はオリヴィアの精神的娘である。彼女は最初からインドに魅了され、インドを愛そうとインドにやってくる。

ダグラスたちはナワブとオリヴィアの結び付きを「女・子供」の結び付きとして蔑んだかもしれない。しかしガンジーの国民会議派はそれから間もなく(1929年)勝利を収め、やがてインドは独立する。

2. ピアノ

オリヴィアが初めてナワブに会ったのは、ナワブが宮殿で開いたパーティーでのことだった。ナワブはしばしばオリヴィアに見とれ、オリヴィアは気がつかぬふりをしつつそれを楽しむ。また「ダグラスは他のイギリス人と違い、魅力的だ」ということでハリーと意見が一致する。ハリーはナワブの宮殿に寄留するイギリス人である。ハリーとナワブは深い友情で結ばれている。人々の退屈な話を、ホストとしての礼儀からナワブが面白がっている振りをしていること、その実的確に召使への指示をしたり、様々なことに冷静に気を配っていること、また同席しているイギリス人たちの真価をすっかり見抜いているらしいことに、オリヴィアは気づく。ハリーを仲立ちに、ナワブとオリヴィアのつき合いが始まる。

タイトルにもなっている「暑さと埃」がインドを表すとすれば、オリヴィアが弾くピアノがイギリスを表すと言えよう。ダグラスは、毎朝オリヴィアが目覚める前に仕事に出かけ、日暮れまで帰ってこない。夫のいない長い時間をもてあまし、オリヴィアは閉ざされた室内でピアノに向かう。しかし暑さのためにピアノの音は狂いだし、それもあってオリヴィアは次第にインドの気候はピアノ向きではないし、「ドビッシーやシューマンは（インドには）合わない」(129)と思うようになる。

これより早く、あるときナワブは「オリヴィア、君はピアノがとてもうまいけれど、まだ私のピアノは弾いてくれたことがないね」と言い、彼女を入り組んだ宮殿の地下の、納屋のような部屋へ案内する。そこにはヨーロッパから注文したとおぼしきありとあらゆる品物が詰め込まれていた。あるものは荷を解かれ、あるものは梱包されたままで。グランド・ピアノとアップライトと二つあるピアノは音が完全に狂っていて耳障りな音を立てるのみであった。「なんていうことかしら」と驚くオリヴィア。「全くだ」とナワブも悲しい気持ちになる。「青髯」を思い出すまでもなく、地下のがらくた部屋はナワブの魂の秘

密にかかわる。そこでナワブは心の秘密を打ち明ける。そのピアノは妻のために注文したものだったこと。去っていった妻・サンディーはスイスの学校に行ったモダンな人で、ちょうどオリヴィアのようにだったこと。そして美しかったこと、ちょうどオリヴィアのように。打ち明け話を聞きながらもナワブの求めに応じピアノを弾き続けるオリヴィア。しかし彼女の手元から響いてくるのは調子っぱずれで奇妙な音でしかなかった。こうしてナワブとオリヴィアの友情が深まっていった頃、皮肉にも彼女とダグラスは子供を持つことを真剣に考え始めたのであった。

出会ったときからナワブとオリヴィアそしてハリーは価値観と判断力、感受性を共有している。ハリーにとってナワブは単に対等ということを超えて、並のイギリス人などとても足元にも及ばないほどすぐれた、魅力的な人物である。ナワブは（対等な存在として）オリヴィアに惹かれているし、オリヴィアにとってナワブは自分たちと同じ現代人なのである。(69)そのへんの認識が、オリヴィアはクロフォード夫人やミニーズ夫人とは異なる。そして夫ダグラスとも異なるのである。(38)

3. 乾期の風景と雨期の風景

「イギリス人はおろか、インド人にすら耐え難い」気候。あまりの暑さに人々は落ち着かず、いらいらし、何をしても不快である。いくらドアや窓をしっかりと閉ざしていても、強風が吹き荒れれば砂はそこら中に入り込む。そしてこの暑さと砂嵐が何カ月も続く。決まってヒンズー教徒と回教徒の間には小競り合いが起こる。この暑い季節、イギリス人の女達は夫を残して避暑に出かけるのが習わしである。だが愛するダグラスをおいて暑さから逃げ出すなど、オリヴィアには到底考えられないことだった。そしてオリヴィアはインドの風景（暑さと埃）を受け入れることを次第に学んで行く。車で迎えに来たハリーと共にナワブの宮殿に行き、そこで日中を過ごし、夕方ダグラスの帰宅前に帰るのがオリヴィアの日課になっていく。そしてサティプールからカーツームへ向かうドライブの車窓の風景を受け入れることを、次第にオリヴィアは学ぶ。

オリヴィアは次第にこの朝のドライブが好きになったきた。そうね、な

かなかいわ。——こんな景色をどうして人が好きになれるのかさえ分かるようになってきたわ。事実、オリヴィア自身この風景を好きになりつつあった。広大な大地、広大な空、砂埃と日光、そして時折廃墟と化した砦、寺院、そして墓地。その光景は彼女が慣れ親しんでいるものとは大層かけ離れていたの、地上の別の土地にいるというよりも、全く別世界にいるかのようにだった。(85)

二人が相似た魂であることを確認しあうのも、また二人が結ばれるのも、バーバ・フィアダウス寺院という小さな寺院のある辺りでのことである。それは砂漠の中の、奇跡のような緑の森、冷たい澄んだ水の流れるのあるところなのである。(46、137)

このようにオリヴィアは暑さと埃を受け入れるようになってくるし、その焼けつくような風景の中には奇跡のような場所もありはする。しかしそれ以外は暑さと埃はうんざりするものとしてたびたび言及されるに過ぎないし、まして普通のイギリス人にとってはなおのことである。

オリヴィアとは対照的に「私」にとっては乾期の暑さは人々との一体感を味わう素晴らしいチャンスであった。ボンベイ到着の晩に泊まった宣教師協会ホステル女子寮での光景は、すでにその後の「私」のありようを物語っている。カーテンもない、開け放たれた窓の下には雑然として、しかし活気に満ちた夜の風景が広がっている。そして室内には横たわるヨーロッパ人たちの姿。それはカーテンのない窓から入ってくる外の光の加減で、白っぽい死体のようなのである。オリヴィアの足跡をたどり、オリヴィアの心に何が生起したのかを知ろうとインドにやってきた「私」は、「死体」の並ぶ部屋の窓辺に立ち、外の風景に見入るのである。「私」自身が言うように、彼女はオリヴィアとはあらゆる点で正反対である。ピアノは言うまでもなく、大した荷物も持たずにインドにやってくる。そのあまりに簡素な暮らしぶりに、西洋文明の精神面と物質面の双方に引かれるインディア・ラルは失望を隠さない。ラルは「私」の大家である。

3月10日。次第に暑さが増し、人々は屋外で寝るようになっていた。人前で寝ることを恥じ、暑さに耐えていた「私」もついに耐え兼ねてベッドを中庭に

引きずり出し、他の人々に加わる。そして幸福な気持ちに満たされるのであった。

私は何時間も眠らずに横たわる、幸せに包まれて。人々とのこんな一体感はまだ味わったことがない。夜空の下にこうして横たわっていると空間に溶け込んで行くような気がする。といってもそれは決して空っぽの空間ではない。というのも私の周りには沢山の人が、街中が眠っているのであり、私もその一部なのだから。部屋の壁しか眺めるものがなく、自分の本しか読むものがない、ということがしょっちゅうの、ロンドンの私の寂しい部屋とは大違いだ。(52)

オリヴィアには恐らく望んでも味わうことが許されなかったであろう、暑さのもたらす利点——人々との圧倒的な一体感を「私」は存分に味わっている。しかしその一体感は「私」がよそものであるから、インド人の若い女ではないから味わえるものでもある。そしてその幸福を破るものがある。ラルの妻リテュの叫ぶ声である。リテュはしばしばヒステリーの発作を起こす。生まれ育った家と家族から突然引き離され、なじみのない土地のなじみのない家でいわゆる嫁としての、著しく自由を奪われた生活を強いられる。そのストレスによる心身症でもあろうか。それに引き換え、ラルの母とその友人たち、つまり未亡人たちは元気一杯で我が世の春を謳歌している。これら元気な未亡人たちやラルの母、そしてマーjay（女呪術師）との交流も、「私」には許されてもオリヴィアには味わえなかったものの一つである。

ナワブとオリヴィアの心の通い合い、いわば最初のクライマックスの直後に「私」の人々との一体感の幸せが語られる。この二つはちょうど呼応し合っている。つまりナワブとオリヴィアの心の通い合いは単なる恋愛というより、インドとイギリスの心の通い合いの比喩なのである。「ナワブ—オリヴィア」の関係では一対一の関係でしかなかったのが、「私」は普通のインドそのものを受け入れられるようになってきている。もしくは「ナワブ—オリヴィア」という結び付き（とオリヴィアの残した手紙）があらかじめあったからこそ「私」はインドを受け入れることが可能となっているのかもしれない。

霧で煙って見える雨期の風景は、窓から見るとまるで涙をすかして見るように、いよいよインドを去ろうとしているハリーの気持ちを表しているかのように悲しげだ。それはまたナワブのかダグラスのか分からない子をおなかに宿し、どうしたらいいか悩むオリヴィアの気持ちでもある。ナワブもダグラスも、それが自分の子と信じて疑わない。しかもダグラスも「(自分のために) 息子を生むという勇敢な行為をしてくれるのだね」とナワブと全く同じ言葉でオリヴィアに語りかけ、オリヴィアを動揺させるのであった。オリヴィアにとってはおなかの子ですら自分のものではない。生まれ出る前からそれは男たちにとっては「僕の息子」なのであり、そのことは相手がインド人でもイギリス人でも、1923年のオリヴィアにとっては同じなのである。ナワブは(それが自分の子であると信じて疑わず)、生まれてきた子を見てダグラスがさぞショックを受けるだろう、とハリーに語った。それを聞いたオリヴィアは「どうしてそんなに確信がもてるのかしら」とハリーに尋ねる。「君はそう思わないの」と聞き返すハリーに答えず窓から手を出してみると、雨が降り出している。「柔らかな雨。目にも見えず、音も聞こえず、それでいて目に映る風景——庭の四阿、パール・グレーの壁、そしてモスク——はすべて、砂糖が水に溶けるように、まるで自らの意志で溶けだしているように」見えたのであった。墮胎を決意したオリヴィアは、ベガム(太后)にその手助けを頼んでくれるよう、ハリーに頼む。(161-162)

これに対して「私」にとって雨はポジティブなものとして描かれている。「雨はすべてのものをしっとり輝く緑に染め上げた。そして王家の墓の青いタイルはきらめき、そここの小さな水たまりの水は光を反射し、まるであたり一面に宝石が撒き散らされているかのように見えた」(165)のである。彼女にはおなかの子はインディア・ラルの子とはっきり分かっている。そして彼女は男のために子供を生むのではない、いわば自分のために、あるいは生きて行く営みのごく自然な一部として、子供を生むのである。彼女はマージャイに墮胎するかと問われ、「ぼんやりとした好奇心」から「ええ」と言う。しかしそのマージャイの治癒力を持った手からエネルギーを受け取りつつ思わず「やめて」と叫ぶ。マージャイは最初から彼女が子供を生む気になることが分かっていたというのだ。このシーンは『インドへの道』のマラバー洞窟におけるムア夫人

の体験に匹敵すると言えよう。前述のようにムア夫人は洞窟の暗闇で、残響効果に圧倒され、邪悪な存在を妄想したのであった。それに比して『暑さと埃』では暗い家の中のマーシャイが「私」には実物より大きく見え、「生と死を司る神話的人物」のように思われる。またその手はとても熱く、癒しの力を持っているようで、何かを「私」の体内に送り込んでいるようであった。(164-165)ムア夫人が未知のものを悪と結びつけているのに対し、「私」の態度はもっと開かれていて、インドの土俗的なものの内に肯定的な生のエネルギーや今と言うヒーリングの力を受け取っているのである。

4. オリヴィアの選択、「私」の選択

「私」にとってオリヴィアが精神的母であるなら、オリヴィアにとって「私」はありえたかもしれない未来の私、1923年のオリヴィアには想像すらつかなかったほど自由でのびやかな生を生きる私である。その未来の私にあててオリヴィアは手紙を書く。と言ってもそれは意図してのことではない。姉マーシャにあてて書いた手紙が時をこえて義理の孫娘＝「私」の手に渡る。その手紙はオリヴィアとナワブとの付き合いが始まったころからひんぱんになり、オリヴィアがナワブのもとに逃げて行ってからはほとんど書かれなくなったという。

オリヴィアが他の妻たちのように避暑地にでかけずに夫の元に留まった真夏のある日、リヴァーズ家でガーデン・パーティーが開かれた。食事の後一人家の中に入って行ったオリヴィアはベランダに出て庭を見下ろす。そこでは三人のイギリス人の男たちが、オリヴィアのいなくなったのをこれ幸いと、ナワブの不穏な動きについて話し合っている。オリヴィアは奇妙な気持ちにとらわれる。彼女はその庭のタブロー——真夏の暑さにもめげず、ディナー・ジャケットを着込んで葉巻をくゆらす三人のイギリス人の男、そのまわりをデカンタを手に飛び回る召使たち、即ちインドの中のイギリス——の向こうの、月光に照らされたソーンダース家の建物、小さな教会の尖塔と墓地の中のお墓を見た。そして彼女の視線はそのはるか彼方、彼女のよく知っている平坦な風景、カーツームに続く何マイルもの埃っぽい大地へとさまよって行った。(93)

ここでオリヴィアが奇妙な気持ちにとらわれているように、オリヴィアのダグラスへの気持ちは次第に変化してきている。またダグラスも変わりつつある。

それを象徴的に表しているのがパイプである。二人の心のすれ違いはパイプを巡ってすでに小説の最初に巧みに示されている。「インド人たちは自分が大変ずる賢いと思っているけれど、実際は子供みたいなのだ」とダグラスはほほ笑んでパイプを真鍮のフェンダーにたたきつける。するとオリヴィアは「まあ、あなたったら」と抗議する。ダグラスはオリヴィアがパイプのことを言ったのだと勘違いする。「私にはとても大人に見えるけれど。」ダグラスは笑って受け流す。「そう？みかけはそうかもしれないね。でも一旦分かれば…」(38)と。オリヴィアは、インド人は劣っているとダグラスが思っていることを問題にしている。しかしダグラスはオリヴィアがパイプの灰が散らかることを問題にしこそすれ、インド人の実態など問題にするわけではないし、するべきでもないと思っている。

そして暑さにもかかわらずパイプをふかす夫に対し「ダグラスは他のイギリス人と同じようになって来ている、耐えられない」とオリヴィアは感じる。また彼女はそれまでダグラスのイギリス人らしい堅実さが、男らしさが好きだった。しかし「どんな男らしさだというのだろう、私を妊娠させることすら出来やしないのに」とオリヴィアは皮肉な気持ちで考える。(116)夫が男らしさを誇りながら妻を妊娠させることもできないという現実をきっかけに、夫による妻支配の構造に、イギリス人によるインド人支配の構造に、オリヴィアは違和感を感じ始めているのである。彼女は耐えかねて叫ぶ。「どうしてその素敵なパイプをふかさなくちゃならないの、こんなに暑いのに。」しかしダグラスにはオリヴィアの苛立ちの本当の理由は伝わらない。彼は単にそれを暑さのせいにし、シムラに避暑に行くべきだった、と言って片付ける。確かに暑さのせいもあるだろう。だが本当に問題なのは暑さによって精神が不安定になったときに揺らぐ、その価値観なのである。オリヴィアやダグラスたち第一世代までの物語だったら、「女が暑さでおかしくなった」で恐らく終わりだろう。しかし『暑さと埃』はその50年後、つまり次の次の世代にまでわたる作品なのである。しかもオリヴィアはインド独立後もインドに留まり続けるのだ。「私」は自分もインドにいてみなければ分からない、と思う。

具合の悪いハリーの様子を診にナワブの城を訪れたソーンダース医師を、ハリー、オリヴィアそしてナワブの3人は散々馬鹿にした。その後「ソーンダー

スさんを基準にして判断しないで」とオリヴィアが言うとナワブは冷ややかに「何を」と尋ねる。「私たちみんなを」とオリヴィア。すると今度はハリーが「『私たち』って誰のこと」とやはり冷ややかに尋ねる。「僕を他のイギリス人といっしょくたにしないでくれ」と言うハリー。「でもクロフォードさんやミニーズさんや、それにダグラスも、ソーンダースさんとは違うわ」と言うオリヴィアにナワブは「みんな同じさ」ときっぱりと言う。オリヴィアは大変ショックを受け、「他のイギリス人」といっしょにされることを恐れ、ナワブに嫌われないためには何だっただけ、と思うのだった。(122)このときからナワブがオリヴィアの心の中で占める位置が、つまり彼女の価値観がはっきりと変わり始めたのだ。

ダグラスは西洋、ナワブは東洋をそれぞれ表す。オリヴィアはそのどちらかを選ぶことを迫られる。しかしオリヴィアは子供を生まない決心をすることで、その決定を回避する。原始的な墮胎手術の経験は、一方でナワブのもくろみ——(首尾よくナワブとの子が生まれればだが)自分との子が生まれ、ダグラスらイギリス人への復讐を果たすという——を阻むが、また一方でオリヴィアがナワブを選ぶことへのはずみとなっている。オリヴィアの選択——ナワブとインドを選び、ダグラスとイギリスを捨てる——は当時にあっては極めて異例のことだった。そしてそれはまた本書の語り手の、自己探求の旅の前触れともなっているのである。オリヴィアも「私」も自己認識を失わず、圧倒されることなくインドをあるがままに受け入れている。オリヴィアの手紙によってインドのことがある程度分かっている「私」は偏見を持っていないためにインドの人々の中に溶け込める。またオリヴィア以上にインド人の物の見方がよく分かるのである。

5. 涅槃

ジャブヴァーラは欧米人のインドに対する態度の変化には大きく分けて三つの段階があると言う。

第一段階、大熱狂——インドのものは何もかも素晴らしい。そして第二段階、インドのものは何もかもそれほど素晴らしくはない。第三段階、イ

ンドのものは何もかもぞっとする。たいがいの人はこちらで終わりになる。しかしこのパターンをまた最初から繰り返す人達もいる。私はあまりに何度もこのパターンを繰り返してきたものだから、今では私の体はぐるぐる回る車輪にくくりつけられているのだと思っている。あるときは上の方にいるし、またあるときは下の方にいるのだ。¹

この小説でも様々な段階のヨーロッパ人が描かれている。そして作家ジャブヴァーラ自身はそのどれに属するのでもなく、インドの良い面と悪い面の双方を客観的に描いている。

『暑さと埃』の語り手のインドでの経験——すべての人々とのつながり——はその土地に触発されたということもあるにせよ、涅槃と同じく、究極的には心の状態のことである。「私」はジャブヴァーラが繰り返し描いている「探求の旅をする女性」の一人である。彼女はオリヴィアの足跡を辿るうちに、ニルヴァーナへ至る道を見出したのである。

年をとった女の乞食が死にかかり、「私」は何とか助けようとする。しかし誰も手を貸してくれようとはしない。病院に連れて行くとしたら「私」が自分の手で抱き上げてやらなければならない。そして伝染病だったとしたら…。「その乞食は死んでも仕方がないのだ」と「私」は思い始める。そして自分が他の人達と同じようになりつつあることに愕然とする。「私」の周りのすべて——人々も風景も——が「私」にそういう態度を取れと迫ってくるようだった。だがマーjayの反応はまるで違っていた。「何だって、リーラヴァティが？彼女にお迎えが来たって？」マーjayは彼女を捜し当てると自分の膝に彼女の頭を乗せ、なでてやる。すると突然女はにっこりする。まるで赤ん坊が幸福そうにほほ笑むように。マーjayは優しさのある種のプライドを持って女をなで続ける。そして女の人生について「私」に語って聞かせる。夫に死なれ、嫁ぎ先を追い出されたこと、その後両親も兄も疫病で死に、宿無しになり、乞食となったこと。「もうこの人は疲れたのさ。死ぬときが来たんだ。もう十分生きただからね。」

辺りが薄暗くなり、空と空気と水が銀灰色になり、鳥たちが黒々とした

木立に止まって眠りにおち、今や銀色の空をひらひらと飛び回るのは、音も立てずに飛ぶコウモリだけとなった——そんななごやかな時間に、彼女は死んだ。私も気づかなかった位ひっそりと。マージヤイはとても満足した。そしてリーラヴァティは立派に生きた、その報いとして良き死、祝福された最後を与えられたのだ、とマージヤイは言った。(113)

このようにオリヴィアの経験したインドと、「私」の経験したインドは違う。オリヴィアの体験したインドはラジヤナワブのそれであり、「私」のインドはいわば非暴力主義のガンジーのインドである。混沌としてはいるが、エネルギーに満ち、また70年代には西洋人から「魂の故郷」と慕われたようなインドなのである。オリヴィアが行けたのはインド人居住区の手前の湖のところまで。しかし「私」はまさしくそのインド人居住区に住んでいる。また「私」は自分を「町の一部」だと言う。「彼らの食物を食べ、彼らの服を来ている」からだ。「私」はまた男物のサンダルを履き、「ヒジュラのように」と言われている。ヒジュラとは宦官のことで、男の体型なのに女の服装をし、女の仕草のパロディーで人を笑わせる。しかしその顔はいつも悲しげだ。(9)

オリヴィアと「私」の共通点は偏見のない目でインド人を見たことである。「私」は最初からいわば涅槃に達している。インド（ヒーローの名はインディア・ラル）と出会う準備が十分に出来ている。その理由としては三つのことが考えられる。一つ目は時代（若い女がインドで自由にかつ安全に歩き回れる）、二つ目はオリヴィアという先達がいること、また三つ目はパーソナリティの違いであろう。オリヴィアは男性依存的生き方なのに対し、「私」は自立している。或いは人に頼りはしても、特に男性だけに頼るわけではない。また「産む」ことを選び、「高み」へと達している。また「私」の語りの自由でのびやかな感じは、彼女の開かれた心のありようから来るのだろう。

イギリス人もインド人も様々な偏見や因習にとらわれている。オリヴィアと「私」の二人はそれらにとらわれず、インドの様々な面を受け入れて至福の境地に至る。オリヴィアの始めた巡礼の旅を「私」が引き継ぎ、やり遂げているのだ。ダグラスもナワブもそしてラルも最後にはもはや重要ではなくなり、

マーチャイや乞食女に象徴されるようなごく普通のインドそのものが「私」にとって大切なものとなってくる。

最後の方でオリヴィアが晩年を過ごしたという、その部屋の窓から外を眺め、「私」が思い描くシーンは、「私」がインドやインド人を真に対等な存在として受け入れられるようになったことへの賛歌であるとともに「私」＝女の解放の賛歌でもある。

見えないものだから、山の頂が今まで夢に見たどんな山より高いのだと想像してみる。それに山のとっぺんの雪は他のどんな雪より白いのだ——あまりに白いものだからそれは光り輝き、今まで見たこともないような深い青の空を背景にきらきらと輝いている。それが私が目にするだろうと思っているものだ。それはまたオリヴィアが見たものでもあったのだろう。その眺めないしヴィジョンこそが彼女がこの地にいた間中彼女の瞳を満たし、また心を満たしたものだっただろう。(180)

インドの持つ自然の一つ、ヒマラヤ山脈の威容を描いた見事なシーンである。しかし問題は残る。一つには「私」の物語のヒーローであるラルである。彼がナワブほどふくらみのある人物ではなく、また最後にはあまりに影が薄くなってしまったために、「私」とラルとの間にコミュニケーションが本当に成り立っているのかが疑問になる。むしろ「私」の成長のための契機を提供しているにすぎないのではないか、という疑いを拭い切れない。またこの作品を書いたあとジャブヴァーラが25年住んだインドを離れ、アメリカへ渡っているという事実も見逃せない。

しかし、以上のような事を考慮に入れても、『暑さと埃』が『インドへの道』のいわば異本としての意味を持つ傑作であること、そしてインド人とイギリス人とのかかわりを、50年の歳月をこえて生き生きと描き出しているということは揺るがぬ事実なのである。

註

1 “Introduction: Myself in India,” in *How I Became a Holy Mother and Other Stories*

(Harmondsworth, England: Penguin, 1981), 9, quoted in Crane, 6.

引証資料

Crane, Ralph J. *Ruth Praver Jhabvala*. New York: Twayne Publishers, 1992.

Forster, E.M. *A Passage to India*. Harmondsworth: Penguin, 1976.

Jhabvala, Ruth Praver. *Heat and Dust*. London: Abacus Books, 1992.

_____. *Three Continents*. Harmondsworth: Penguin, 1988.